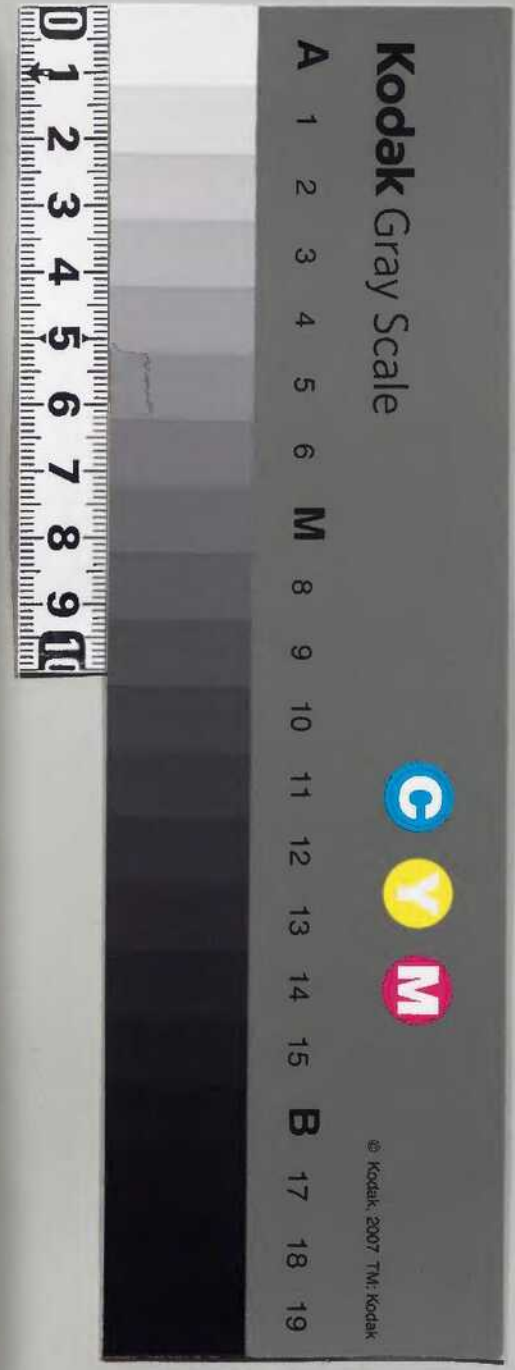


47

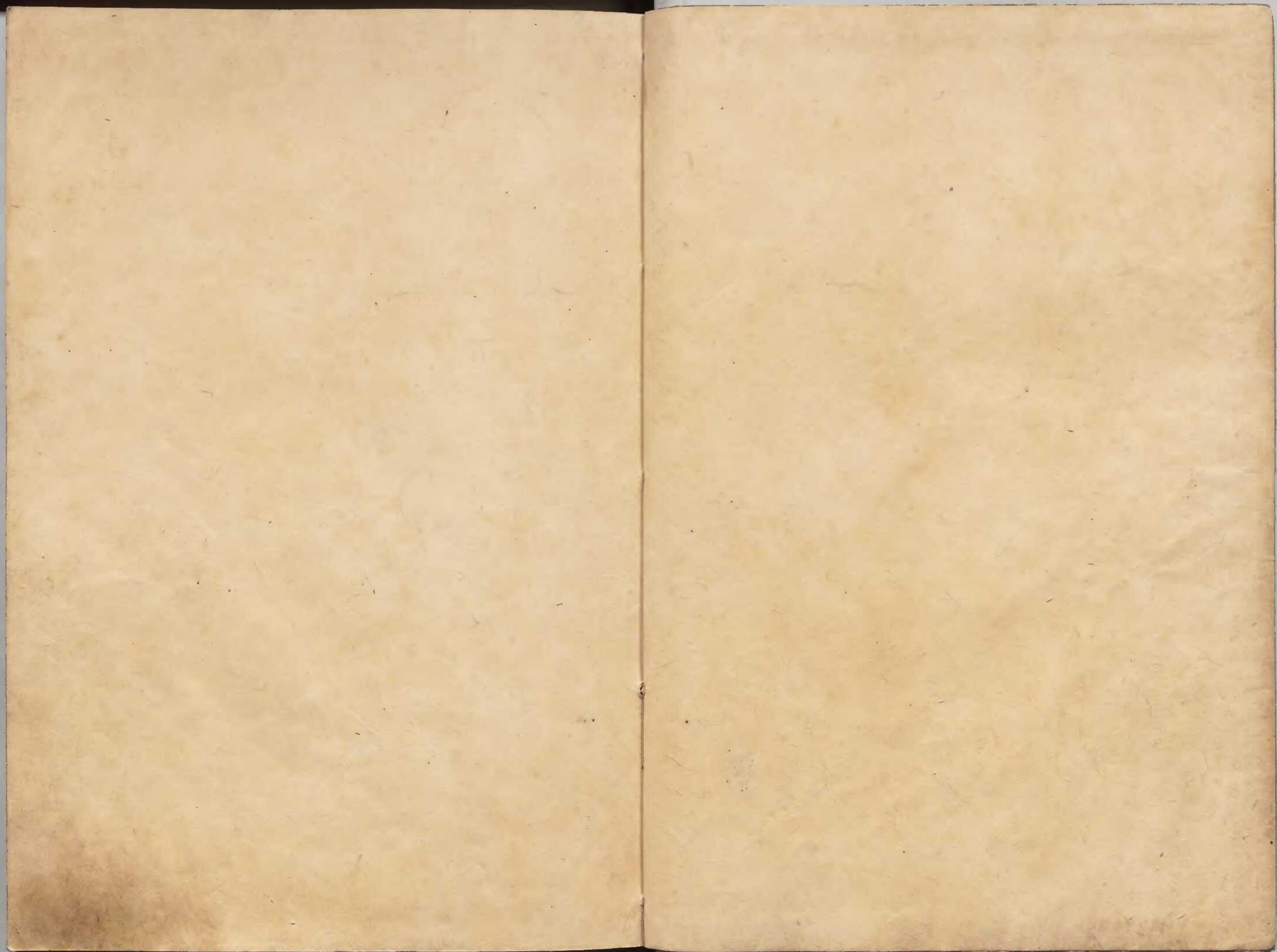
寛永諸家譜

清和源氏辛七冊之内  
義光流之内小笠原

内閣文庫	
番	和 20199
冊數	186 ( 46 )
函號	76 1











お探も 甲斐も 法名榮曾

高倉院の時みことありなりて小笠原

此號と始り甲列の刺史となす

弓馬小達一統はよきすふ故よその

人をれ道成河びりらぬ

建久六年頼朝卿入海の時と書信

と頼朝卿東大寺と造受一徳物小

命して宣天王の像と書きしものし

と此書信もその一像と書きしものし

御材の形なりけり朝の奏して書

ぶのり海陽東山におおく寺院とは

しめく書信寺と号せ

承久年中無執れと此書信とてけ

もの忠切の形よりの宣旨と号ありと

河波のよれも後職と下したまひ家傳

ふいしくじり神功皇太后之御とた

げなふと此王の宮内にて懐れ故と

今此書信とてなり



後冷泉院の御宇康平中源頼義  
了り物して安陪貞信高家臣と誅  
す故と此の月日候と有りていふこと  
らら候とあり候とあり又新羅之節  
義光と物して明と有り發向せ  
し頃の御沖門松皮の蘇と義光小  
なふ義光奥列におりしと云々義  
家と云々は阿比と有りて大と有り  
揚利と  
場より義光より相傳して相換守

書傳よつて候のりがゆへに松皮と  
く小笠原の家紋とす

今按じらるる義光奥列の御し  
義家がらるる小東の御し  
りひくありと云々この家傳と物  
自れより及らるる東登よりわて考  
へた事バ永保三年九月義家奥  
列少く武衛家衛と合戦のと此義  
光東登より有りてたを傳尉より



長孫 なご

けり傳方之朝廷警衛の南友と稱  
して弦鼓と殿とふと此おまじくひう  
のふ奥列下向すと云志色は勅  
許よ何らざるものさしけり

源太郎 恒正位下 孝仁も

高倉入道と号と 法名長禪

承元年中 實朝よはる

六波羅評定所 河波玉の右後職

長忠 なかと

次郎 恒正位下 善原頭 甲斐守

法名兼蓮

長政 ながまさ

孫次郎 恒正位下 彈正少弼

甲斐守 法名長河孫



長氏 ながうぢ

長五郎 後日位下 彈正少弼 甲斐守

治戸大物 甲斐守 信名長連 名譽

宗書 むねかき

孫次郎 後日位下 信長守 麻呂 あまのむら

号寸 信名順長 名譽

尊氏卿 勅ふりて 関東小發向

お孫次郎時行と征代の時書宗書

小たふりて詞よいく

朝敵追討之事 勅命下り 宗系  
作子お禮一族合のりんが意は

とく

五月十九日 高氏判

小笠原信濃入道友

関東合戦事 子山早 弟建 約禮

宗系 為悦作とく



六月 高氏判

小笠原信清入府

貞宗

貞宗 貞宗 貞宗 貞宗 貞宗  
建武二年高氏山門とせし家と貞宗  
貞宗と河内野海藤原一強て  
湖上信清はあはれとせし山信成願坊律

師とらとら志う家よ信成信成判友  
入道乃参河内のも護職河内う家  
れとれ貞宗と海寸高氏直義貞宗  
う戦功と感て書とたよりのう此詞  
小い

新田義貞以下凶徒等事度  
合戦毎度亦待平物申去月  
悔り来りし旨伯耆高去年并  
解黨教子人或討死之或生れ之



弓山門之軍 踏お跡 分不幾  
上之物多 以没為抑 又為港人 取  
參也 實如風 少志 義貞 以下  
没為東國 云々 自東玉 山乃  
馳參軍 暫々 居住 近江國 打止 湖  
舟之 性反 及 倉粮 二 打取 没為 軍  
踏 云々 伊予 和 觸 山 道 海 乃 尋 跡 之  
衆 如 伴

建長二年七月五日 高氏判

小笠原信德書及

昨日十五日 注を 付らる 十六日 午刻  
到 來 押 去 云々 取 云々 野 海 藤 原  
打 揚 山 從 成 願 坊 同 十日 打 鏡 宿 并  
伊 吹 大 平 寺 取 取 被 合 戦 云々 軍 忠  
云々 玉 結 心 神 妙 也 抑 又 東 玉 軍 坊 を  
日 可 系 海 云々 弓 踏 多 揚 云々 下 及  
云々 沙 古 可 若 是 軍 坊 於 近 江 海 云  
相 副 近 江 伊 坊 取 國 軍 打 依 來



作渡判友入乃道登且退治凶徒且  
可敬けいじ國東道くにとう道みち由被よ修しゆ下事  
同謀どうぼう伐は彼か凶徒きゆうてい等ら罪とら連ら又また海うみく状  
如件

建武二年七月十九日 直義判

小笠原信清書

同年八月廿五日義貞よしかげ之の没落ぼつらくす  
時とき小笠原貞宗よしかげ之の命いのち一ひとて勢せ多た此こゝ橋はし  
東坂あづまざか中なかつ之の殺ころ向むかとと危あやらしの由よしととつく

うの書小いしく

今日けふ女におのりし凶徒きゆうてい等ら殺ころ子こ人ひと被あ殺ころ  
伐は了し就すなは中なかつ八幡やっぺん路ぢ大おほゆゆ人ひと  
被あ殺ころ猶なほ前まへ被あ殺ころ珠たま也なり雖なほ就すなは義貞よしかげ以下以下  
軍い没な落ら山やまのの由よし、と退ひ世よ田の橋はし可た殺ころ  
向むか東あづま坂ざか中なかつ之の状よし如件

建武二年八月廿五日 直義判

小笠原信清書

曆りき應お年とし中なかつ貞宗よしかげ上の海うみへへ為な氏し判



福一 弓馬の法橋とありて長家の定

式となす

初後醍醐天皇御時貞宗禁中

出入て河内とありて丹墀より

一め河内とありて射所禁つよありて

うれ急遇よ河づらりなりびれ

是より佐之介より後大徳源

の室よ入る才子礼法なり泰

正多居士と号す信列伊暖らはの店

おおく禪刹とありて用者るとありて

大徳源とありて用山は社所とありて

氏寺と称していよいよね續と

貞和三年五月二十六歳少く逝去

送葬の夕御史書よ勅しとありて

監護せしむ時の人乞と榮とす

政書

孫次郎

後五位下

右衛門



兵庫頭 遠江守 信濃守 法名  
去也

觀應元年 高氏が軍に備男右衛門  
直冬肥後守に没落して國中に歸せ  
輝起せしむるに高氏が軍に備男右衛門  
向と高氏より詔書へおろすのと此書  
と政書ふたよりうけ詞ありいづく  
九列略起事 直冬稱沖之右衛門  
七年 高氏依りて高氏を教不審所

發向也 高氏が一族并信濃國之地  
頭沖家人高氏が上國國并  
被高氏之分交名宛文式通遣之守彼  
状可沙詰之状也

觀應元年十月廿一日 高氏判

小笠原重頼書及

同二年七月に高氏が督直義判發して  
高倉禰つと号す高氏と敵討し  
越前此高氏没落のとは此高氏より書



とたまり候

高倉禎たかくらねの卜うらなひ向むか小玉こたまくくる遣つか使者しや了し

隨したがちた右みぎ重おもつて被おこ給たまへし中ちゆう先せん度ど降くだり

高倉たかくら津つ敷しき書しよ為な礼らい入い南なん玉たま志し切き塞さい通つう

臨りん可か致ち防ぼう我が旨しよ不ふ相あ觸ふ一いつ族しやく并なら地ぢ

頭かぶ津つ家け人にん為な母ぼ又また自みづか然か後ご玉たま打うち入い

上かみ野の小こ若わ率そつ軍ぐん場ば馳ち向むか皮かわ取と可べ

袖そで合あ我が忠ちゆう節せつ一いつ状じやう如ごと件けん

觀應二年八月十日 高氏判

小笠原を以て書す

同十月どうじゅうがつ在あ義ぎ越えつ赤せき玉たまりり福ふく倉くらよよじじううん

ととままりり此こゝ政まつりごと事ことととままりり福ふく倉くらよよじじううん

將軍せんぐん感かん悦えつななめめああすすして二にびび回かい

書ますすととたたままりり候こう

臣おんをを伏ふ披ひ見みるる忠ちゆう節せつ一いつ玉たま持もち心こゝろ神かみ

妙たう高かう倉くら禪ぜん門もん身み小こ玉たま関かん東とう下げ向むかへ

有ありりとと少せう子し相あ得とく一いつ族しやく并なら分ぶん玉たま軍ぐん場ば

切き塞さい通つう路ろ陣ぢん可か致ち我が切き一いつ状じやう如ごと件けん



観應二年十月五日 為氏判

小笠原を以て為教

同年十二月正平六年 為氏忠義と追討の

ため鎌倉より發向のしに政書佐列の

河りく戦忠成しよよりわ為氏後河

ふより感状とたまり終るれ詞り

いり

去十日 河を杖披見平佐列 函後忠

討揚沙方討揚作榮忠高 玉丸

先づ 祚妙也仍お返治富士川 函後 今月十日  
於由山を陣 平徳ら去十方 お高原  
河原 函後 教百人 討揚 沖方 打揚 平  
返治 相抄 函後 急可 為發向 関東 不廻  
時日 可 就 泰海 乃 心 必 詳

正平六年十二月十五日 為氏判

小笠原を以て為教

同為氏身第の書ふいり

十方の合戦よゆいりんがらあくら







乃この伝列に發向のと此より氏より書  
とたまり家より書ふいりく

伝信國番坂英作も以下凶徒為對治  
發向く衆む心非妙也亦不致忠節と  
情此件

文和二年七月五日 為氏判

小笠原も存物及

同日午正月政書伝信の玉におめく  
上松も存物補傳縁次郎等とおくく

傳利とう海乃しほをーけし軍  
義詮より回書とたまり

上松兵庫助補傳縁次郎以下凶徒為  
ら合我由り去月十六十七あり我功  
伝を情披見記致忠節とく心非  
妙也實お玉人等不系軍名あり有  
傳沙信て浪津交名お沙敵陣城  
為者不日可對治情此件

文和二年七月廿六日 義詮判



小笠原右庫助

長基

孫次郎 恒立位下 右庫助

彈正少弼 信濃守 信濃清頭

長基院と号す

觀應三年為氏より信濃の五女

氏より始り終書一通是河り

延文元年義詮より始り終書河り

長秀

次郎 恒立位下 右庫助 修理左衛門

信濃守 信名正捷大通寺と号す

永徳三年二月ア方父長基より熱傾

職と懐り河りより終り終書河りの目

録河りりの奥書の略よいく

右取傾者お副沖下文并代より續

記文等取懐り長秀也より終り代坊



若者秀正男子志金才士用大丸  
儀与敢不可儀他人の为後日自業  
取儀状如件

惣永六年冬大内少義弘和泉の場  
おたふも此御軍義儀より自業  
此書は若者秀正より於て御用  
何れも御用同様に御用  
さへいづら大さほくしんあんな  
一河りれりくうまのてま  
り

此のいふまゝいよなうま  
たごうまもあんないのだん  
り

惣永六年十二月十日 義満判

小笠原信乃書

英徳の玉中河の比次職信徳の玉佐吉  
の店甚道儀若者秀正宛のしる義満  
より給り二通の書およりひ義持の書一  
通河り



彦太郎 後位下 右馬助 治部左衛門

大播大更 信徳忠 法名正透

應永十二年 兄忠秀が勲行職とゆり

河子次遺書小いり

懐与金才右馬助政康所

可之朝恩年中領恩賞之代為右依

世上忘刻且暮難約しる 願之懐状

変也忠秀実子お身おけ懐状不立

院文之時又不可有遺礼若也若主

実子者但亡父清順之遺文より自政康

可之相續一治次政康以後主之實子若

自政康も金兄播戸も若ぬ

男可懐与彦次郎仍為法日懐状輝

應永十二年十一月九日 信徳前司判

應永年中 政康武田隆興等と同一く

関東小發向して戦功として子時義持



軍より給り致感状一通是有り

同日義指信法と文科料取付願書は

より政康より給り此書なすびよ感状の

回を發せしむるの書二通是有り

永享の申義教の軍兵法と此地の

職を政康より一にけり又作行の

して関東より發向すむるの書二通是

有り

同日より関東發向のよりよはねと上校

安房守の路よりして軍忠といふとむる

の書一通は是有り

同日は政康信列と生田別府と

せめおとて我切のりとの義教より感

状なすびよ久國のたよりとていふと

有り

越知河差寄祿津政康と生田別

府と城より一にけり又作行の

一にけり



二月六日 義教判

小笠原治平右衛門左衛門

同じく信列海野合戦にともき政康  
孫利とゆりふりて感状なりびよ来  
國光のたりとゆりふりて書よいん

と度射祢海野合戦に討致忠臣  
親友に被任し申候を承  
る来を神妙仍た力一勝遣之也

五月十八日 義教判

小笠原治平右衛門左衛門

同じく信列小笠原にともき政康  
退治のたに政康が武略より苦由治平  
す是より義教感状なりびよ真忠  
た力とゆりふりて書よいん

華田下野も事と治平に申候を  
承る来を神妙仍た力一勝遣之也

八月三日 判

小笠原治平右衛門左衛門



同じ比政康越後の公に發向して村と  
申物大物とお戦く勝利とゆふら明が  
ゆへに感状なりとびは貞宗の大方版巻を  
と給りるる此書ふいふく

村と申物大物及合戦く交付に後  
ゆへに感状なりとびは貞宗の大方版巻を  
と給りるる此書ふいふく

と也

十二月廿日

義教判

小笠原治政大物金道友

同十二年五月下総公に發向して臨城  
此報とせしは時政康副將軍此号とな  
りて凶徒とせめりら持氏の息女五凡  
安五凡と生拘て徳列を并よおわくこ  
ゆへに感状なりとびは貞宗の大方版巻を  
と給りるる此書ふいふく

と度臨城報事 即時政康出後等



建討捕刺屠王丸安王丸平良路  
一勝遣之也

二月廿六日

義教判

小笠原大膳大史合友

宗康

二郎 恒也位下

大膳大史 信徳也

法名宗順

永享十二年父政康よ志ころひく強城  
此戰場よおのじき疵とつうの忠切  
小より義教感懐なつびよ益光の太刀  
とたもふうけ状よいつく  
諸城敵事即時攻落自刃并被  
友人等被疵し衆尤ら感思食惟  
の大方一勝遣之也

二月廿六日

義教判

小笠原二郎友



文安二年 不康持と相願職は相編  
乃禮文とつく是と決と不康け禮文  
と可揚と

光康

六郎 信忠下 信忠也

法名法建

父政康兄不康が遺書とつく相願職

と信りといふり  
亨徳康正也福寛正のる相軍れ命に  
より岡東の發向一 新田治部大権  
属して越後よ發向一 村と吉部也  
正治一 又本尊と加増と一 徳川の凶  
信とよりより我切とぬき入いし忠節  
とくひもすゆ義政相軍より結る  
感書之通二道一あり



家書

六郎 坂下 左衛門 甲斐守

法名普治

文明五年義政の命ふり英法は  
小おとしき教ヲ取れ城とせおと  
敵軍とらり家書が家人の忠と  
明あふれ軍功と感て義政より  
書と家書なび家人の中へたより

同日比義尚の軍に命ふり河野の  
後より關東の強敵とたけげ戦功  
とらりそのとら義尚感懐して書二通と  
始り

定基

六郎 弾正右衛門 兵庫助 左衛門

甲斐守 法名禅忠

文書の中義尚の軍より始り書あり







けさば

大権現うれ心ざいと感懐一掃ふすか  
くら人質とゞく志志のきか  
すふぶらじの 釣命ふら書子とんざら  
ふなりてゆくお湯と

同年七月

大権現軍と甲斐佐佐木のおまよか  
たまたま佐佐木 釣命とつら  
兄子酒井忠次とつら佐川

沼津郡高橋の城よりこせし討水  
衆氏直が士卒輝起すこまよか  
忠次佐佐木とつら  
新府より大道の遠河もといふ  
事救目なりとつら

大権現氏と相戦りし甲斐佐佐木の  
あ國あらく見幕下小属とあゆみ  
信州伊豆の甲斐相馬の城と佐川  
ゆり



同十二年

大権現を治秀吉と馬列者久とにお  
て合戦乃れ此信嚴又忠次よついで  
小牧の城れあきなり

同十六日 物命よより忠次が三男小半

次郎と信嚴が長子とす小半原為依

信之とれなり

同十八年二月秀吉氏政氏直と信成  
の此信嚴父子とて

大権現よ志こづひもり先づけとらけ給ハ

いそく 相州小田原よ發向す

同九月信列の弟氏とあつてあつて

氏列兜玉れ那よりけり中庄の城よて

二百石と願と

慶長二年二月十九日卒と五十二歳

法名道也

信之







台徳院殿ハ野列より東山道と名く沖  
發向河の所修之又此れは志さるひもり  
信列波祖海よおとしく信之釣會と  
うけし海りて信列若村城のおと  
こしては海と川とけ修列書見の城  
ふもよれおとれを鳥の一換とあひ  
たのく古年村死しるもの久人死と  
ふもよれおとれを鳥の一換とあひ  
たりありひとえと追りて郷人の離

あす終のそとれが取よくは是り  
よりく後軍信是乃通海うれ海と名  
と得しりうのり

台徳院殿修列小縣れ殿よりなまし時よ  
志田安房も昌幸と固れ城とまよりりて信  
きたるより日河の室よ信之が信是  
友右衛門幸長も戦死しうの外症と名  
あはれ多し時よ河原の合戦と名  
ふもよれおとれを鳥の一換とあひ



台座院殿法親王教向一巻之修之又乞  
一巻之修之

同十七年

台座院殿法親王命より武列見玉の御成  
めしあましく下総に著飾の御衣河の  
城より修り御衣河にて二万石此地と  
し海に流

同十九年四月廿九日  
同十九年 法名了過

政信

伊勢次郎 後立位下 左衛門尉

天文十九年十月大坂参籠乃と政信  
少少少

台座院殿法親王命より海より先軍浦井

左衛門尉家次と申す結列より東山

道成屋と申す結列より東山

台座院殿法親王命より政信浦井



此城とまのり大坂和陸と移りて後聖  
の長統別右河より入城  
同年三月大坂再戦のとき政信又  
と仰ぐ実東より城列より入りて  
備よたひらと五月

大権現

台徳院殿大坂御教向れと此又政信  
命しと伏見此城とまのり  
四月七日大坂落城の役六月右河

へ

元和三年三月

台徳院殿日光御系福此時沙彌と右河の  
城よとあたまも還河のときも又志あり

同五年十月

台徳院殿此御命いり右河とあり  
玉園宿の城よりけり二万二千七百七  
十余石河傾

寛永九年



將軍家此釣命を呼ゆり大坂城乃沖島  
 此とあり聖子くは分國東えんより出給  
 同十二年又釣命より後府の城より  
 のり聖子十一月江戸より出給  
 同十六年釣命より杉子貞信と政信が  
 家督と守主膳貞信是なり  
 同十七年七月江戸より病死年三歳  
 法名瑞雲

貞信

新五郎

主膳

實たう高木権右衛門尉貞信まこと子信のぶ之の外  
 孫まごなり

寛永十六年

釣命より政信が家督

とけく

同十七年九月総列國宿所此城は河

この徳川石津の郡におおく二万二千

七百七十七石此地はたまり高例の城

居



家紋松皮

家傳小いりく小笠原相模も長尾九世の  
孫長尾庫助長基の子之河りも長尾相模  
長尾といひ次之信濃も長尾といひ次  
之右馬助政康といひ長基の孫  
おとびくも信職なりびよ父を信も政長  
が長尾信長と次男も長尾よゆゆりも長  
又是と政康も長尾政康の子長尾

是と相續も長尾の子と長尾の孫も  
いふ長尾と信職と相模して京都  
柳宮政下よおわく相模よおと信長  
是河りも長尾ら當家代々此書成  
るべき長尾下中信相續の御教書成  
りて感書なりびよ長尾長尾の長尾  
ふりりて傳受して長尾の長尾よおと信と  
多し信長中よの長尾下中信長教十  
通是河り長尾の長尾と信長



志道なみちにすかりし者清きよより貞信まことよりなり  
二十代小笠原一流いっしゅうの惣領職そうりやうしやくとね續つづす

ふゆれより

今按いまあじりし貞信まことが系圖けいづは志道なみちとより

右みぎと志道なみちは父ちちと母ははの代しろの院いん

又教またしやく十通じゅうつうといふ事ことなり志道なみち

と志道なみちは又忠政あつしやう又信忠のぶしやうも系圖けいづ

小いん持こいんぢりも秀ひでが子こなり物もの也なり政まつ

康やすが嫡男ちやくなんなり志道なみちは物もの也なり康やすが弟あになり

松尾まつお公卿こうけいと号なづせし康やすと持ぢ也なり不和ふわ

あ志道なみちは合あ我がのあひし康やす持ぢ也なり

ふろとれく持ぢ也なりはあは後あ醍たい留りゅう山さんが執しやく

達たつよりりていよと惣領職そうりやうしやくとゆるり也なり

但忠政たんとしやうも次つぎが系圖けいづは代しろの血脈けつぱくとね

續つづして新あらたなる子こはあひよりり也なり

介けい又曰またいふ康やすが子こ政秀まつひでと持ぢ也なりが孫まご也なり

朝あそと志道なみちは我がとつと後あは和賸わじやうと

松家まつけ傳でんは書籍しやくしやく秘ひ也なりと受けと録ろく也なり



恒と久康が才光康が孫六郎某門  
 法名徹泉松尾より珍号よりりて家  
 法に相傳と徹泉はあつ政秀と密に  
 ありて家書流傳して下條より海老  
 物孫と棟徹泉よりりて是と追が長  
 棟が次男恒定は松尾の城よりりて  
 是よりりて棟はこれに禮文は松尾より  
 河原の部河のり貞恒が系は久康兄  
 久康が孫とてとより久康が孫

貞忠松尾の城よりりて子孫おほく  
 是は孫とて志はもと政秀徹泉恒定  
 がこも城の世次より外は諸おまじ事  
 是れりていづれは是なりとて  
 すこゆつとあ道と河のせのせと松尾の  
 不問のゆつとりておれと圖して冬  
 考にうたふゆつたれと

忠政書次系圖の目



長基

長秀  
政康

長持  
小二郎

持長  
志政長次郎

宗康

政秀  
長次郎

光康

貞信系圖の凡

長基

長将  
長持  
長次郎

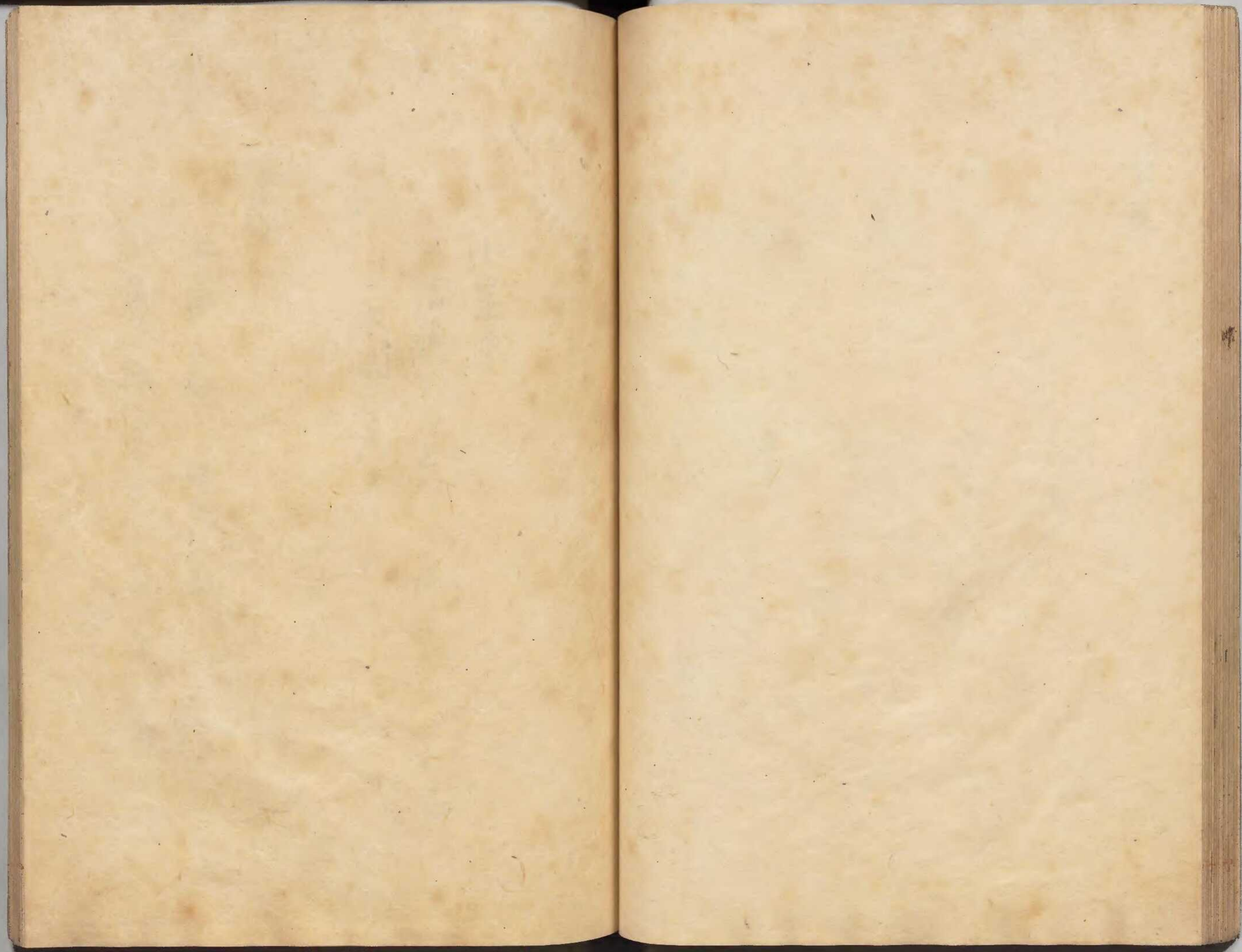
長秀  
受長基長

政康  
受長秀長

宗康  
受政康長  
長光康  
家督

光康  
貞信祖







信のぶ頼のり

小笠原

信のぶ頼のりよりとつるつら祥しやうよりより膳ぜん正せい貞てい信のぶ  
の系けい圖ずよりよりなり

十郎じゅうらう之の郎らう

掃部うべん大だい掾じゆん

信のぶ名な道みち也や

小笠原信のぶ流りゆう也や貞てい系けい十じゅう世せいのの孫そんなり



信之

小平次郎 後位下 左衛門佐  
信名了温

政信

伊治次郎 後位下 左衛門佐  
信名瑞雲 系圖別よ河

信政

三郎右衛門

寛永四年八月十日初

將軍家とある

同年十一月御書院と勅

同五年御切米立百俵とたまり

同十年武列忠の因あり初月と給り

七百石なり

同十九年疾阿るゆへ御祈禱と酒井



和泉守 継之属 小善清の役と成る也

信由

虎助

信統

九十郎

寛永十八年

竹子代君百はつらるるをまじひの侍なり

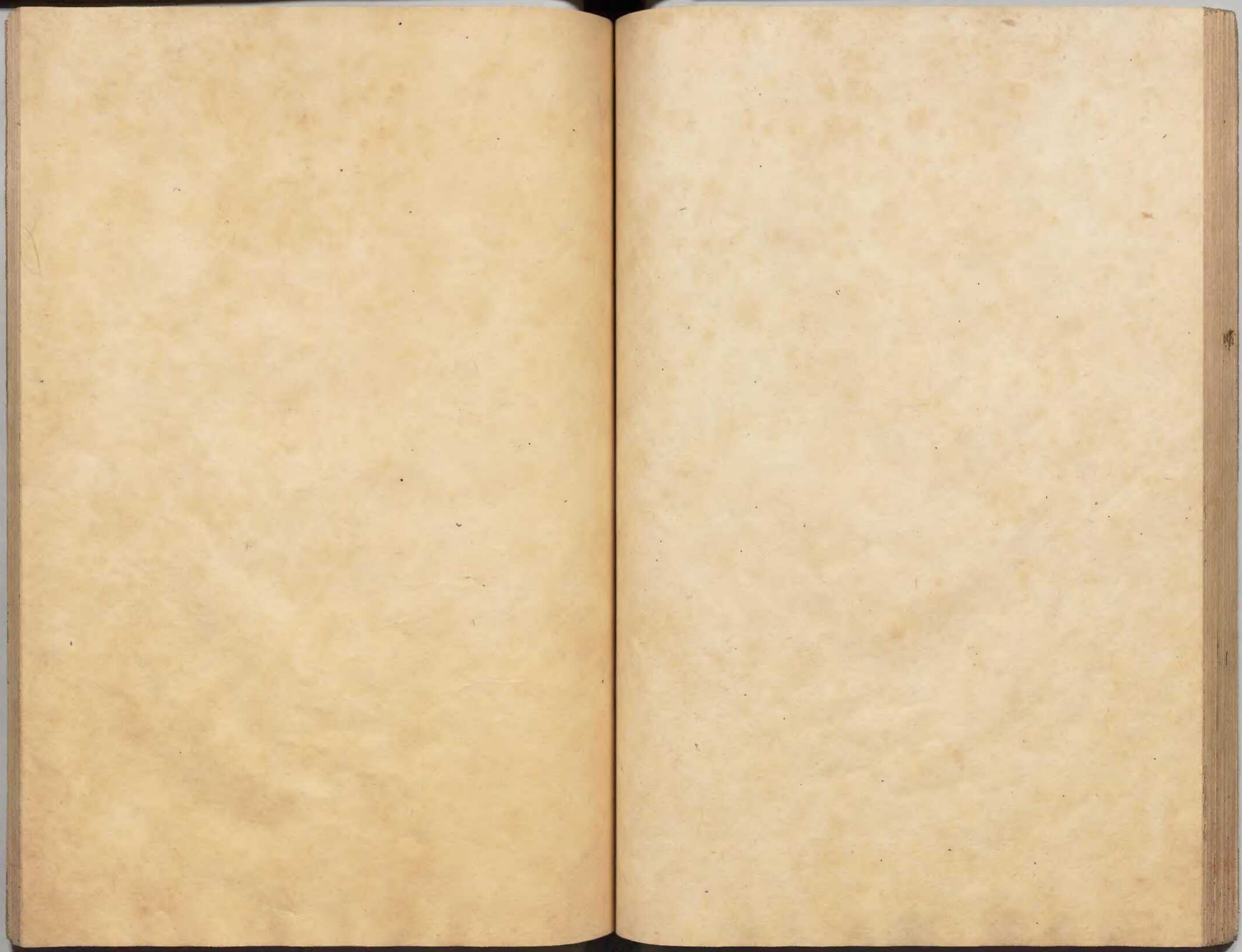
信安

上郎助

女子

家紋 松皮







小笠原

貞忠まことより上かみにたかること祥しやうよよ信しん播は正せい  
貞信まこと播は小こ刀た々々々々

小笠原貞家九代

●貞忠

六郎 彈たま正せい弼ぶ 左ひだり邊へのて作しやう  
法はふ名な心こころ若わか瑞すい安あん



信高のぶ たか

六郎むさし

左衛門下總守

信高のぶ たか 信高のぶ たか

宗盛むねもり

信順のぶ かつ

十郎むさし 掃部大進

信高のぶ たか 信高のぶ たか 道也みちや

長治なが ち

韃靼尉たてがや

安永五年十二月

東照大権現の御成みなり あり 信列のぶ りつ 伊奈郡いな ぐん

松尾まつお の店たな 中なかつ と 沙汰さた と す さら 松尾まつお

乃店の たな 小こ ね かく 食色しょくしき と 且かつ たら たる 小こ

長重なが しげ

圖書助と しょ じゆ

女子



春 なつ やと

靱負尉 ゆき ぬの ぢ

良隆 う たら

木工助 き くの すけ

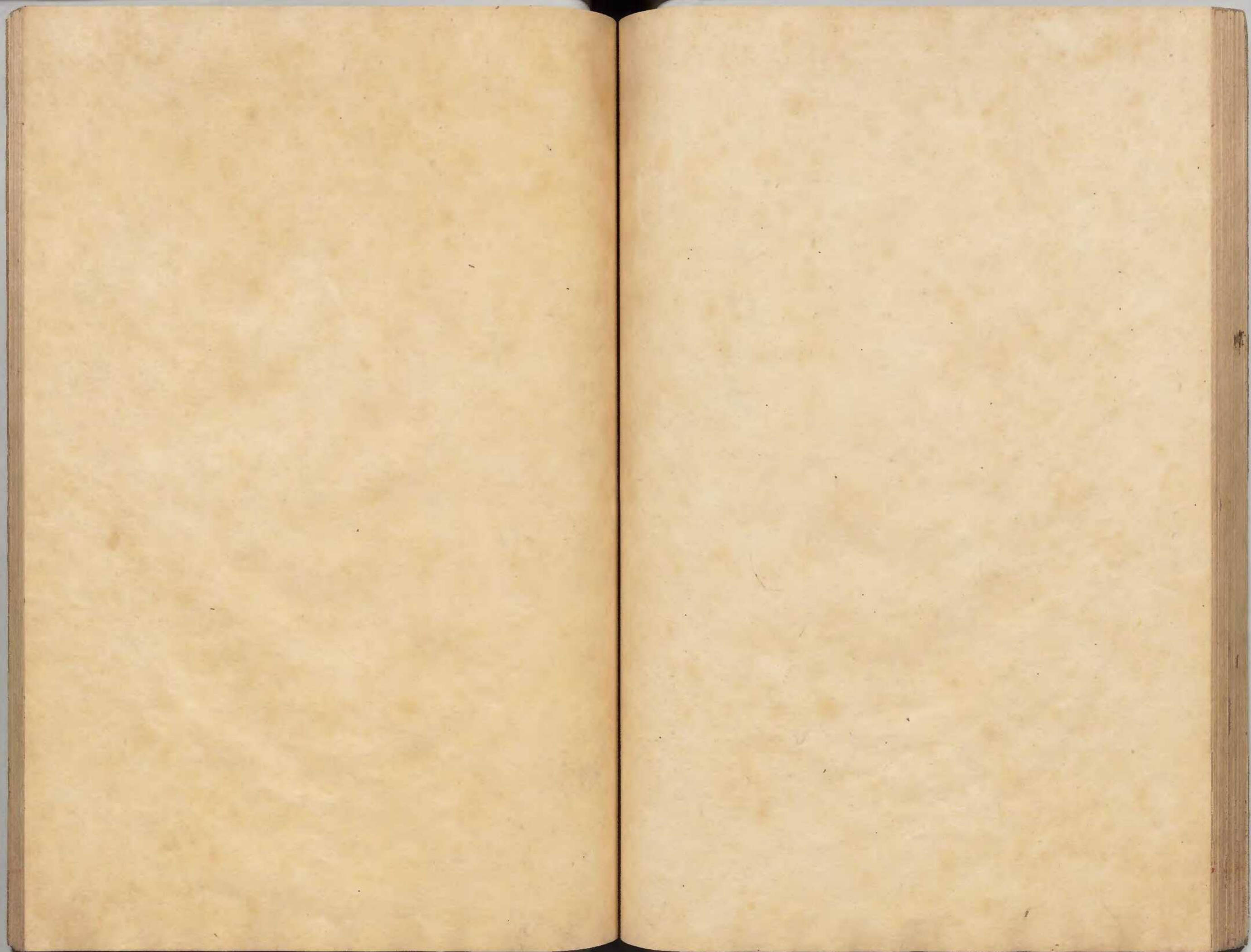
女子

春政 はる まさ

檀弓 だん ぐ

家紋 いえ の ぶん  
松皮 まつ かわ







小笠原

先祖せんぞの御み幡はた是こゝ郡の城しろに居まゐり

● 廣正ひろまさ

長右衛門尉ちやうゑもんゑい 法名ほうな 紹榮せうゑい

今川いまがは 義元よしもとよはし

廣重ひろしげ

長尾ながおの作しやく



永祿七年

東照大権現と稱しくづのこりなる情是耶よおわ

て領地とたまひ給

元龜三年三方原合戦の時濱松城の

御番代はし

天正十二年病死 法名榮胤

信元

安藤云々

元龜三年三方原合戦の時

大権現の侍なり

天正二年長篠合戦の時侍

同日年 約命と仰りし松平國清也

忠次小笠原新九郎安えなりしは信元

為甲列の敵軍と押のさあふを列

振野原よりあり事すくよ六年

なり

同十年小田原城のとくして殺せ



と守りてと妻のほしむるに小田  
原坊之鶴よ出張して合戦を信えつ  
家人小笠原市秀大嶽派吉討死し討  
我功を感しおりの富士郡よおむ  
千石の加増と給り家之救橋よ居り  
とてく九と

同十八年小田原陣よ信也す  
同年 台命とうけく御おと此後  
勅じ

同十九年奥列陣より信也す  
文禄元年名護屋陣よ信也  
慶長元年石田三成謀反の時松平又  
七郎子咲源吉備小笠原新九郎廣徳  
なつびよ信也為 御命とうけたま  
り九鬼大隅守嘉隆とていんごる  
列毛昌隆此城とまり居り  
同十七年死す 法名正冊



廣忠 ひろたけ

孫六郎 生五子

大権現より後 物命ものこと

杉原式部左衛門康政やすまさの属しゆ

安永元年病死 法名 延官えんくわん

廣勝 ひろかつ

孫六郎 生四子

松平式部大物忠次ただじの属しゆ

寛永十六年病死 法名 日永ひのなが

廣安 ひろやす

八右衛門 生五子

元和五年十一月廣安十歳ひろやすの

將軍家しんぐんの

同六年正月沖小姓こしやうの御高ごたかの勅しゆ

信重 のぶしげ

孫三



安永八年

台徳院殿を称し、其時、信重廿一歳  
同十一年病死、法名清月せいげつ

信盛のぶなり

安永やすえ

安永十六年

台徳院殿を称し、其時、信盛十六歳  
同十九年元和元年、大坂の陣の時、信盛

信吉のぶきち

那之崎之水そのさきのみづより、番匠ばんぢやう勅じ

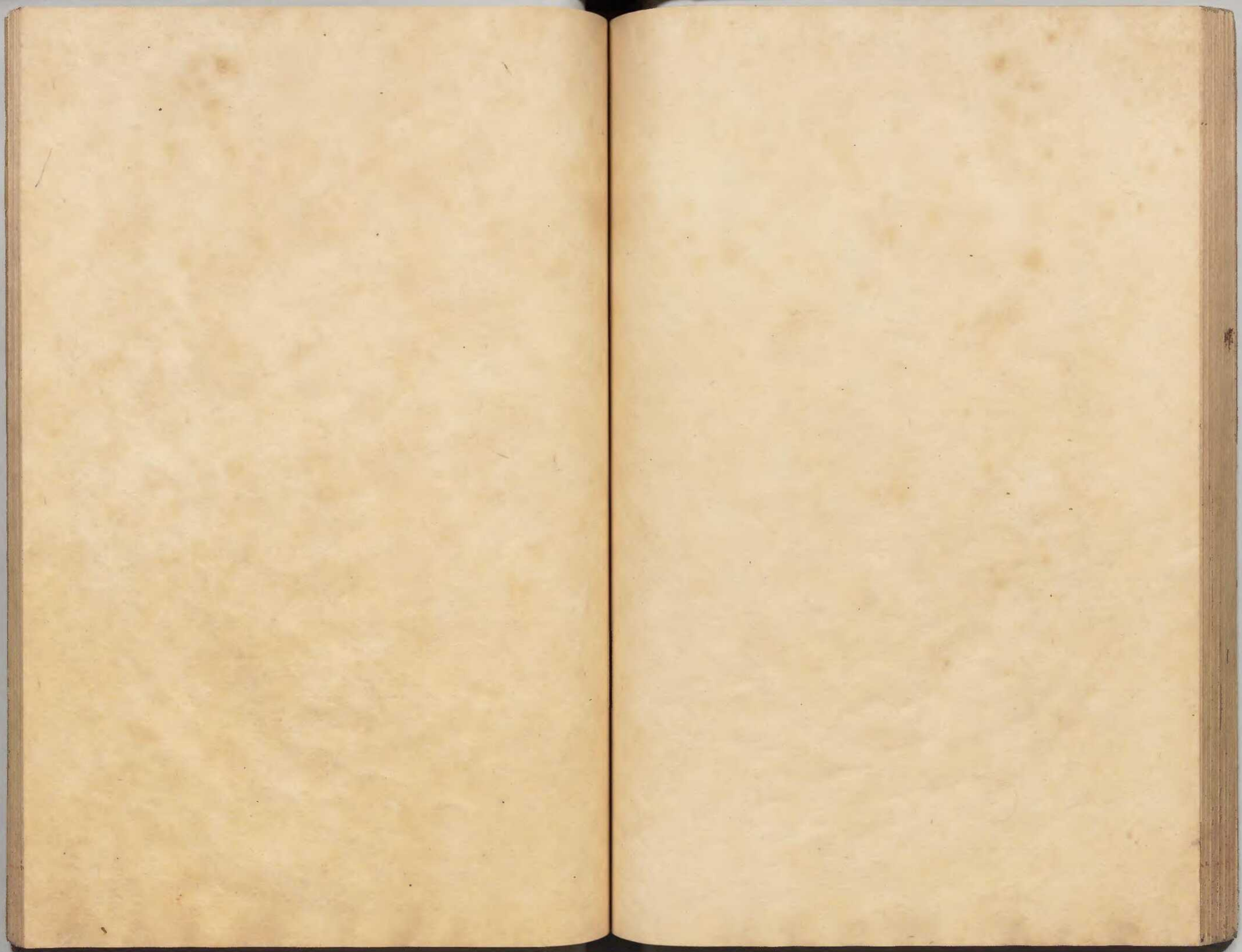
七左衛門 生國上総

元和五年

將軍家しやうぐんけの御一ごいちの御ご

家紋 松皮菱まつかわらび







小笠原

● 安元 やすもと

新九郎 橋津守 生國三郎

後列今川氏了り候ふ

永祿七年四月七日

東照大権現と物もの一ひとなり之この所ところ懐なつか豆まめ郡ぐん

小おわくこわく態まゝ成なり成なり給たまり候



同十二年十二月

大権現浦馬成を列よおし 浦小対甲列  
此軍士とも字五子人と結山系是并  
わくを列見付の寄せ来向時よ小笠原  
与八郎あらん所よと甲列よ通下人質  
と此うりすをいふよ

大権現きよあめーおよと道安えとあし  
て治ふいりくなんらゆひく計略とめく  
らよ八郎よ浦味方よ属とるなり

安えうけし海りり伏塚よゆと向き是  
小はげくなんく人質のなりよおぬく  
を列乃軍士等よとくを城と渡し  
浦味方よまじりこのゆよ

大権現浦感地よよとあふと列貝部  
の田赤輝何志とて村は給りく是と  
領地と

享正十七年十一月晦日病死



安次やすし

丹波守 生少之助たにののすけ

大権現よはくもは

安次家と嫡子安廣よゆづり隠居と

取よ安廣之方取よく討死する小依く

又めく小依くして

大権現少治くもり赤子廣揚はく家督

と譲給

天正十年松平因防も忠次小笠原信元

なすびよ安次等 約命と叫り小田

原に敵討とさうんぐるあに救揚と守

ふうれともき小田原坊とさく小之橋り

奇せ来く合戦しはあよ安次討死と

時よ九月廿五日なり

安猪やすし

赤之郎 太郎左衛門 生國之助

大権現くはくもは



永禄十二年幸河内 然川ひがしのついで  
おわくついでと河内  
元龜三年河内小谷こやの合戦あはれより  
三正之年長瀬ながせのおわくより  
同十二年也久ひさのわくより  
道みちより後

台徳院殿

將軍家へはくし

寛永十八年二月乙酉病死時より九十二

安村やすむら

傳三郎 生國氏翁

寛永二年

將軍家とぬ

安廣やすひろ

新九郎 生國同前

大権現おほごんげんより



元龜三年十二月廿二日三方原合戦此  
と此討死の時十九歳

安勝やすかつ

小五郎七郎左衛門 生國同前

大権現よりくもり

元龜三年の三方原戦場におおく病まひ成

りゆりゆり歩ふふと死しよとて出仕でし

とやじ

寛永元年七十歳より病死

廣勝ひろかつ

新九郎 生國同前

天正年中父安次戦死此後祖父安元

鈎かぎ合あひつけたまはり廣勝とありはれ

う段揚ふりり小田原場とありこの

昌九年なり

大権現より骨と賣うりたるひ富士郡此

うらよおおく赤あか比ひ子こ石いし成なり給たまはれ

寛永五年石田三成謀反の時松平



又七郎タカ子タカ候タカ孫タカ長清射小笠原信元并  
廣揚タカ 上意タカとうけし海り九郎大隅守  
嘉隆タカがタカおタカさタカめタカるタカ尾列毛呂清一  
陣す又大坂本津傳信此舟の御番  
信付タカし

安永六年七月七日大坂よおわく病死  
時一 二十一歳

廣信ひろぶ

新九郎 生玉上総

安ヤシハ安揚ヤシの子なり叔父廣揚ヤシ子なり  
〜病死す時一 二十一歳

大権現小言上りし 納命ふりて安揚  
が子廣信廣揚がまをりてを信りし

大権現よ信りし時よ安永六年十一  
月廿日なりしなり

台徳院殿小信りしなり

元和六年病死二十六歳



廣正

ひり

十右衛門 生國同前

將軍家より流るる

家紋松皮



小笠原

系系

梅津 生國生國

系系

長史 生國生國



義正よしまさ

右左衛門 生玉同前

東照大権現

台徳院殿

右軍家より侍り奉る

義次よしかげ

右左衛門 生國山城

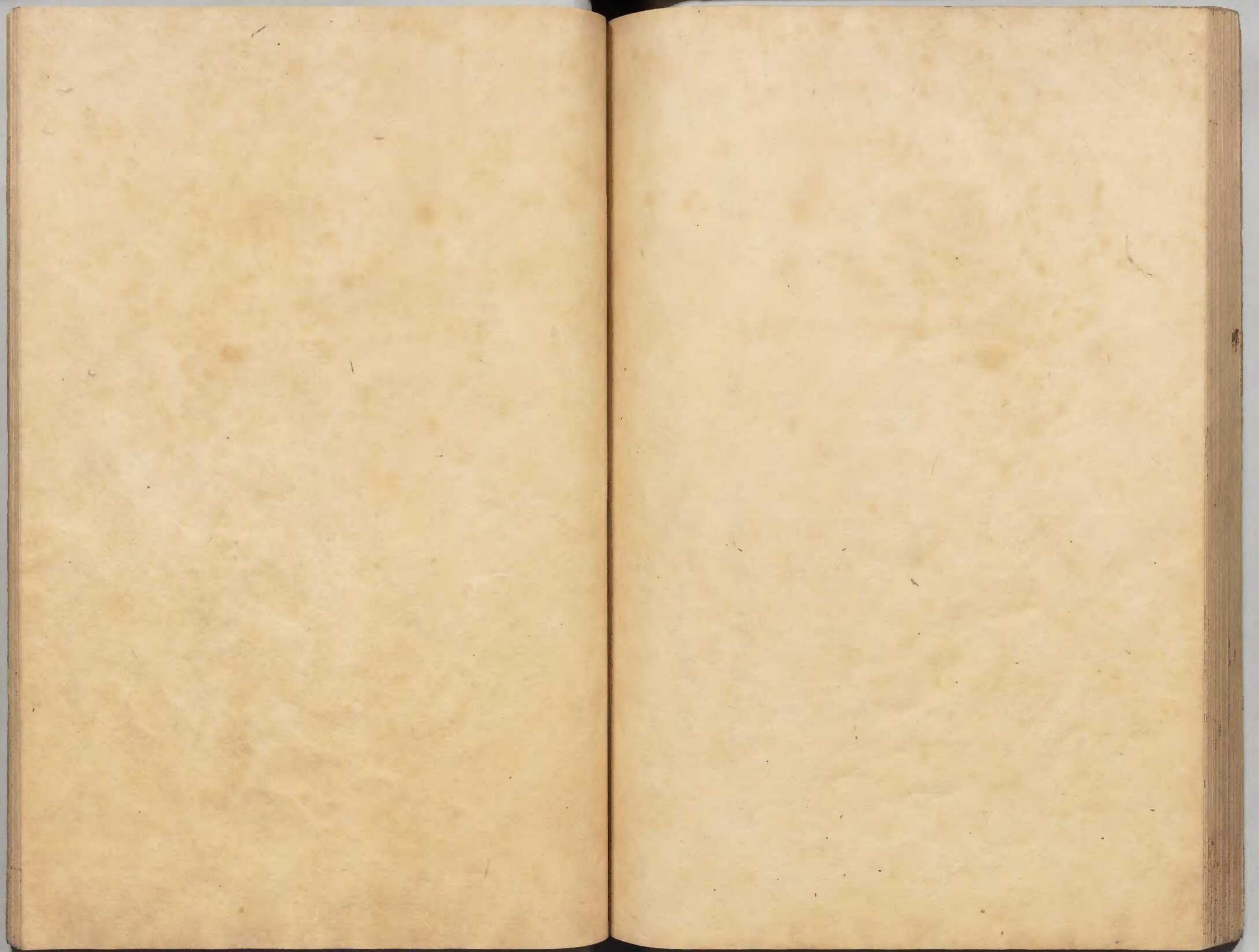
實まことハ牧野まきのの因ゆきの頭かぶ信成のぶなりが子こなり

右軍家より侍り奉る義正よしまさが子こなり

義正

家紋之文字 松皮菱







小笠原

元續

六郎 兵部少将

室町御軍義澄むろむらの流子義澄よし河内波島

乃と此元續なり是ふ志しをひ忠義ちゆうぎと何なにハ

すこのゆへゆへは感懐かんわいを給たまり今いまは是これを事こと

とらむら小田原こだけんよおのししき小栗氏おぐらの



は屬と元續ハ氏細くはあは甥の家は  
川くはなり

康廣

六郎 兵部右衛門 播磨守

小糸氏康氏政氏直ははらふ氏直は時

氏直奉公となす

氏政より

東照大権現へ使を献じ隣國をめぐり

ふとさし康廣すかりし使者となり

淡松へいり酒井左衛門尉忠次より

奏者と言と

大権現をねりし御方守御所

康廣をねりし御方守御所

文禄元年京都よおのくは凡年人

政尚を奏者

大権現をねりし御方守御所

安永二年病死時六十七歳



右房

六郎 市左衛門尉 縫殿助

小糸氏連より

天正十八年小田原落城の時役取廻の奉

行となりを習れ侍二十余人の頭より

軍よりとお勅し氏連没落して高野

小のり終りて氏連是より志しつゝ氏連死

去れ後右房浪人となりし

又福元年京都よりおわく父康廣より

同し

大権現を祀りて

寛文五年

台徳院殿へはくもり美田陣より侍を

同十九年大坂陣より侍を

元和九年

將軍家より侍を

寛永五年松平新左衛門光政の家



嫁娶の時も居 後山より来る心  
河内家より河内

右真

源六郎

元和元年

台徳院殿とね一巻紙

同九年

將軍家より信之巻紙

元定

右門

元和五年

將軍家より信之巻紙

義勝

前田左馬助

前田左馬助尉義久より信之巻紙

寛永元年



將軍家ノ一ノノノノ

家紋之文字松皮菱



小笠原

系

岡野助 生國信列

東照大権現より之奉納

正直

久左衛門 生國同前



台徳院殿へ侍りし事

慶長十九年大坂沖陣と勅めぬ陣

れどもいふ事地を侍りし事

元和九年沖上洛の時侍りし事

後府におおく病死す時よ二十八歳

法名昌悦

直光

久左衛門 生國次郎

實は上杉家侍が家人平川越前守直光

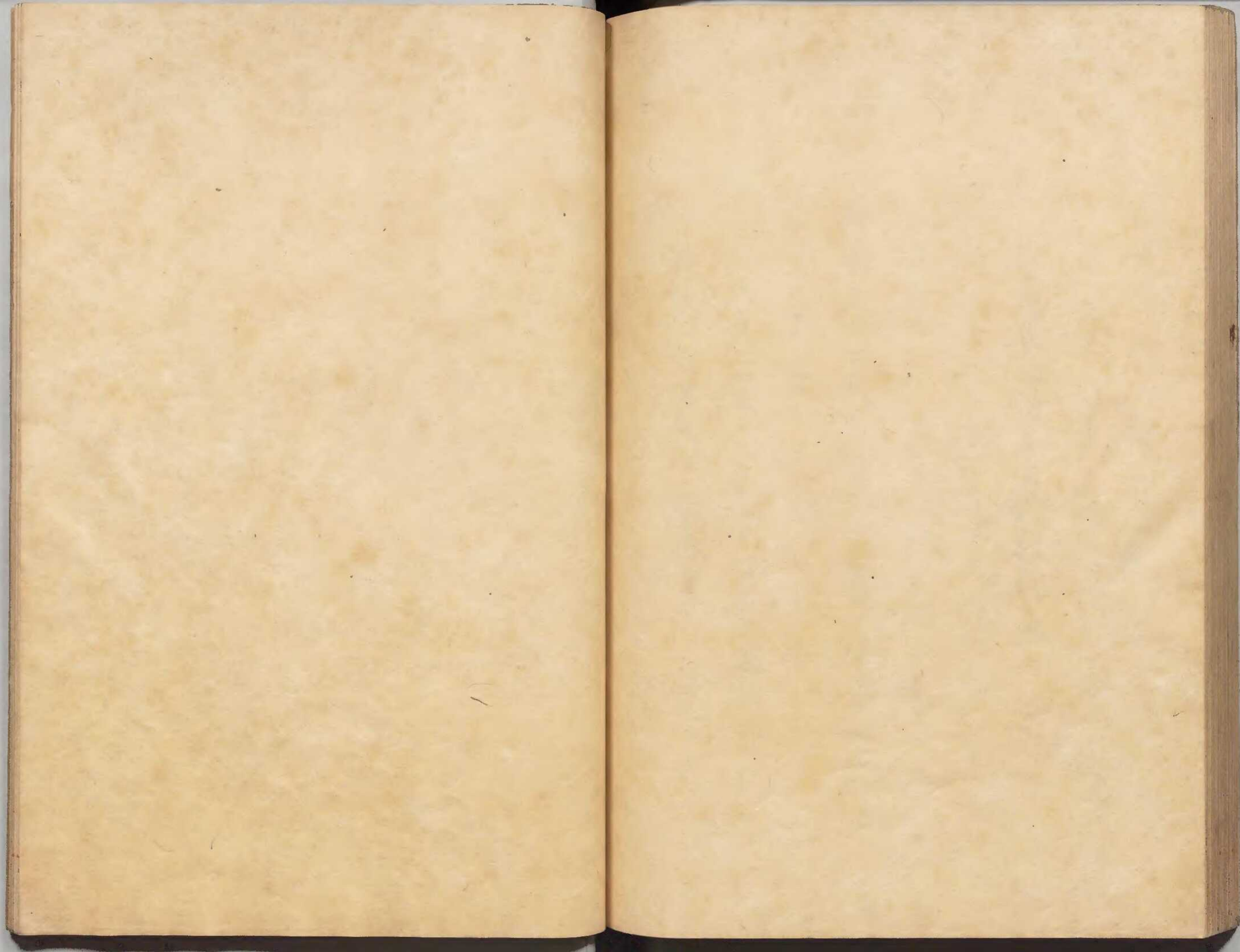
孫大為直光が子なりつ直光屋敷なる

て子とす

將軍家へ侍りし事直光が家督と侍りし事

家紋丸の内よ三階松皮菱







● 通政

小笠原

貞利まことふらり〜河野のふらり〜  
原と号は

河野のふらり 生國甲斐

武田信玄たけだののぶよはら〜今いまはら〜小田原おだわらよはら  
小栗おぐり氏うぢよはら〜又また播磨はりまの時とき〜



て甲列より

盛政

河原庄左衛門 生國同前母小笠原氏女

信玄猶如父子にして

天正十年

東照大権現へ百布され甲列義坂合戦の

とき高名河原原庄と相領す

同十二年長久寺合戦の時高名より

沖加増相領す

同十八年小田原沖陣の時

同十九年奥羽沖陣の時

慶長五年関ヶ原沖陣の時

となり沖陣の時

同十九年大坂沖陣の時

なり沖陣場割と

元和三年病死時七十二歳



貞利

小笠原与左衛門 生國武藏

貞利之母の小笠原家とおぼくのは

なまゆへと森大炊頭利持と

台徳院殿と言上りし河野とありたぬ

て小笠原と号す

寛文十年

台徳院殿より

元和二年 物命とあり志書卿の

はし

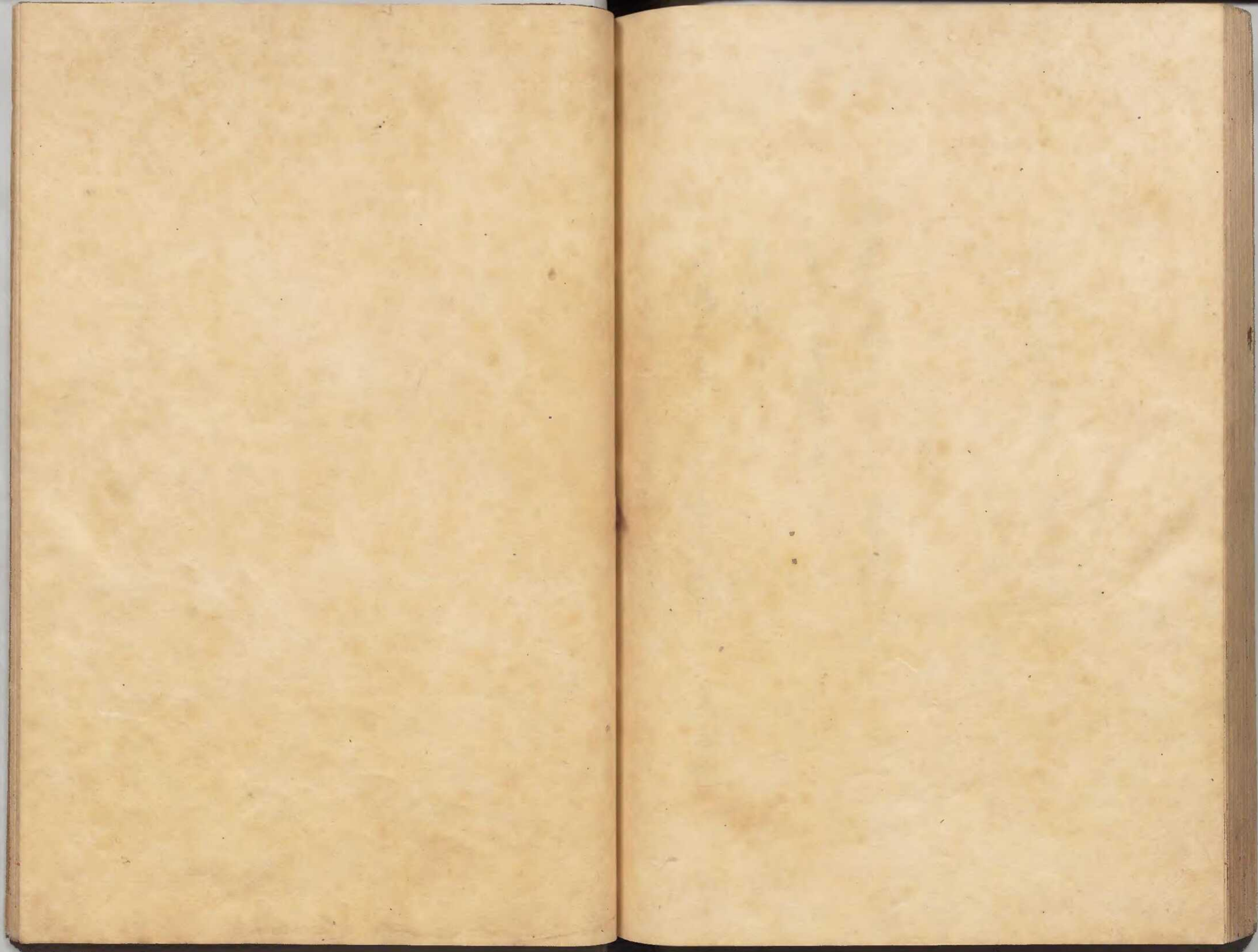
寛永十一年

將軍家とあり

家紋 松皮菱

河野氏とあり  
至徳元年











長子  
長子

源次郎

兵庫頭

法名長禪

清子

源次郎

赤澤伊豆守

豆列赤沢の城に居すこの中より累代

赤沢と称す 法名玄祐

安子  
安子

源次郎

治部少輔

法名玄仙

經子  
經子

源次郎

式部少輔

法名正沢

氏常子  
氏常子

源次郎

伊豆守

法名宗沢

實は同族小笠原経清の子也



恒頭こゝろ実子まことなりこゆへにら子常と成る  
て家督と成るべし

常こ與まこと

又太郎 伊豆守 法名玄徹常與守  
と号す

恒こ光あきら

又太郎 治部守 法名玄定

武たけ恒こ

又太郎 伊豆守 法名乾岳

滿みち恒こ

荒次郎 朝日不況守と号す  
法名玄松

教のり恒こ

次郎 式部守 法名常惠



信列 凍原こむらぎ原はらよおわく討死す

子隆

又太郎 伊豆守 法名普沢

朝經

又太郎 澤新さわしん軒けんと号す 法名宗益  
丹列久世たんりゅうくせ戸と此こゝ文珠ぶんしゆ寺てらよおわく自害じがいす

政經

又太郎 伊豆守 法名普忠  
信列 飯沼いひぬまの敏としよおわく討死す

經智

又太郎 伊豆守 法名玄沃げんくわく生國なまくに信列

貞經

源次郎 伊豆守 小笠原おがさわら丹次たんじ玄通げんつうと







寛永十年

台德院殿子孫一書

元和九年

將軍家一書

寛永十二年八月七日死之時六十歳

法名常林

貞別

丹祿 生國成列

貞治

源守郎 生國成列

元和二年

台德院殿子孫一書

同九年

將軍家一書

家紋松皮 副紋十字字



